

日本英文学会東北支部 第76回大会資料

時: 2021年11月27日(土)
所: Zoom(同時双方向)

日本英文学会東北支部事務局

〒960-1296 福島市金谷川1番地

福島大学 人間発達文化学類 高田英和研究室内

電話: 024-548-8156 / E-mail: tohoku@elsj.org

日本英文学会東北支部

2021年度 大会役員一覧

(敬称略・五十音順)

支 部 長	川田 潤						
副 支 部 長	大貫 隆史						
理 事	大西 洋一	金子 淳	木村 宣美				
	境野 直樹	佐々木 和貴	島 越郎				
	鈴木 亨	竹森 徹士	福士 航			(五十音順)	
大 会 準 備 委 員	三枝 和彦	大貫 隆史	村上 東				
	西牧 和也	齋藤 章吾					
事 務 局	高田 英和 (事務局長)	川崎 和基 (事務局長補佐)					
	佐藤 元樹 (事務局員)						

日本英文学会東北支部第76回大会プログラム

時：2021年11月27日（土）

所：Zoom（同時双方向）

理事会 11時00分より（Zoom）

研究発表

第1発表 13:00 - 13:30 第2発表 13:30 - 14:00

第3発表 14:00 - 14:30

英米文学部門

司会 岩手県立大学教授 伊 東 栄志郎

1. エピファニー的結末 —— ジェイムズ・ジョイス『ダブリナーズ』の「姉妹」

東北大学大学院 真 船 均

司会 宮城教育大学教授 竹 森 徹 士

2. 『トーノ・バンゲイ』再評価 —— H. G. Wells における社会そして未来

東北大学大学院 渡 部 知 子

司会 弘前大学准教授 小野寺 進

3. 『浮世の画家』における他者と語り

東北大学大学院 飯 味 千 秋

英語学部門

1. 【発表なし】

2. 【発表なし】

司会 弘前学院大学講師 齋 藤 章 吾

3. 英語と中国語における間接疑問縮約文

東北大学大学院 坂 本 瑞 生

SYMPOSIUM (14:45~17:00)

英米文学部門

英米文学における記憶と想像力

司会・講師	山形県立米沢女子短期大学准教授	小林 亜希
講師	東北学院大学教授	福士 航
講師	島根大学講師	宮澤 文雄
講師	千葉工業大学教授	三村 尚央

英語学部門

談話依存の形態論・語形成：談話情報はどのように語彙レベルの現象に関与するのか？

司会・講師	新潟食料農業大学講師	西牧 和也
講師	筑波大学助教	納谷 亮平
講師	広島修道大学助教	石田 崇
講師	長岡技術科学大学講師	五十嵐 啓太
講師	岩手県立大学盛岡短期大学部講師	Patrick Maher

13 時開始

研 究 発 表

英米文学部門

司会 岩手県立大学教授 伊 東 栄志郎

エピファニー的結末——ジェイムズ・ジョイス『ダブリナーズ』の「姉妹」

東北大学大学院 真 船 均

「姉妹」(1904)は、一人の司祭のささやかだが重大事故による挫折、敗北を取り上げるアンチ・クライマックス的結末を有しており、そこから否定的エピファニーとして顕現した「空白」、「虚空」、「愛」の性質が描写されている。「未完成の文章」における「空白」は、主題を隠し持っていて「虚空」へと移行する。この「虚空」は、司祭の敵かだが獐猛な死によって、静寂の中、司祭の棺が安置されている家中に醸し出されている。この「虚空」の内に、司祭から宗教教育を受けた少年が居る。この宗教教師から受けた「愛」は少年にとって解し難く、むしろ司祭の死に重圧からの開放さえ感ずる。司祭の「愛」は曖昧であるというよりむしろ「愛」の不在と解釈できる。『ダブリナーズ』第一作「姉妹」の否定的エピファニーは、最終作「死者たち」(1907)を、クライマックス的生者たちと死者たちとの「愛」の肯定的エピファニーを有する結論部とするために、意図的に配置されたものであると考えられる。

司会 宮城教育大学教授 竹 森 徹 士

『トーノ・バンゲイ』再評価——H. G. Wells における社会そして未来

東北大学大学院 渡 部 知 子

SF作家の元祖として知られる H. G. Wells は、その作家活動を、写実小説、社会思想著書へと移行させた。一貫して描かれたのは、人間が開発する科学と人間によるその使用、科学進歩に対する期待と恐怖、そして当時の変化に富む社会状況だ。これらの関係性を的確に捉え、分析し、人間社会は何を目指して進むべきかをウェルズは著作の中で探求し続ける。ウェルズの問題意識は、現在・未来の人間社会において、いよいよその重要性を増してくる。一方、ウェルズ作品を、社会との関わりといった視座で文学的評価を試みることは、現代社会にとって建設的で意義深いと確信する。今回の発表では、上記のような大きな構想を前提に、著作活動の中間点に書かれた自伝的写実小説『トーノ・バンゲイ』を取り上げて、上記の観点から、肯定的に分析したい。具体的には、デイヴィッド・ロッジ著、*Language of Fiction* の『トーノ・バンゲイ』批評を先行研究として、ほぼ肯定的に、一部否定的に論じる。

『浮世の画家』における他者と語り

東北大学大学院 飯 味 千 秋

Kazuo Ishiguro による 1987 年の作品 *An Artist of the Floating World*(以下、『浮世の画家』)では、一人称の語り手である Ono Masuji が、第二次世界大戦において、戦意高揚を意図した作品を手掛けた画家としての自らの半生を振り返る回顧的な語りと、過去を一掃するような戦後の新しい時代において、自らのそのような半生をどのように受け入れるべきなのかという葛藤の語りを展開している。これまで日本文化のコンテキストからのアプローチや、語りの構造の分析がなされてきた中で、Ono というキャラクターをどのように解釈・評価できるかという点が論じられるようになった。戦争に加担した責任は、彼が誇りたいアイデンティティの重要な基盤でもあり、同時に、戦後においては罪悪感を抱かせる過去でもある。本発表では、抗えない時代の変化の中で葛藤しつつも順応しようと試みている彼の語りを、三人称の他者とのコミュニケーション、そして聞き手とのコミュニケーションという点から再検討する。

英語学部門

司会 弘前学院大学講師 齋 藤 章 吾

英語と中国語における間接疑問縮約文

東北大学大学院 坂 本 瑞 生

英語は、目的語が規範位置を離れて文末に生起する重名詞句移動を許す。本発表は、線形化は SM インターフェースで適用されるという考え(Chomsky 2013)を背景に、統語・音韻表示から得られる複数の非完全関係が線形順序を指定すると提案する。そして、この提案に基づいて重名詞句移動の線形化と焦点解釈を説明する。具体的には、統語では主要部-補部関係と支配関係(Collins 2017)、音韻では強勢(Tokizaki 2018)が線形順序の指定に寄与すると仮定する。この枠組みは、規範的語順の線形化は統語的な非対称性だけを、重名詞句移動の線形化は統語的非対称性と強勢の両方を用いる、と分析する。重名詞句移動の線形化は直接目的語の強勢付与を求めると、強勢が焦点に写像される(Reinhart 2006)ことから、重名詞句移動では目的語全体あるいはその一部が義務的に焦点解釈を担う事実も導かれることを示す。

14 時 45 分開始

SYMPOSIA

英米文学部門

英米文学における記憶と想像力

司会・講師	山形県立米沢女子短期大学准教授	小林 亜希
講師	東北学院大学教授	福士 航
講師	島根大学講師	宮澤 文雄
講師	千葉工業大学教授	三村 尚央

近年、文学における「記憶」の問題が注目されて久しい。本シンポジウムでは、イギリス文学部門とアメリカ文学部門に共通するテーマとして「記憶」を取り上げる。「記憶が持つ意味や価値は時代によって劇的に変化する」（ホワイトヘッド『記憶をめぐる人文学』p.17）のであれば、英米文学においてもそれぞれの時代における記憶の在り方とそれに伴う想像力を検討する必要があるだろう。17 世紀から 21 世紀までのテキストを時代毎に取り上げ、「記憶」の変遷を辿りながら、英米文学における記憶と想像力の重要性を確認したい。

疫病・災害・戦争の記録と記憶

サミュエル・ピープスの日記を中心に

福士 航

本報告は、1665 年から 1667 年にかけてイングランドに次々と訪れた国難——1665 年夏に猖獗を極めたペストの大流行、1666 年 9 月に発生したロンドン大火、1667 年オランダ軍によるメドウェイ川襲撃——が、いかに記録されたかを、サミュエル・ピープスを中心とした日記作家たちの記述に辿ることから始める。日記記述に残されたこれらの出来事が、その後いかに日記作家たちに記憶として蘇ってくるか（あるいは蘇ってこないか）を追いながら、「個人的記憶」と「集団的記憶」のあわいに目を向ける。最終的には、ピープスのなかに直近の英蘭戦争の記憶が近過去の内乱の記憶を呼び覚ます様子を確認しながら、「集団的記憶」の維持／更新、捏造／強化に演劇関わった可能性を検討したい。

白い幻影

シカゴ万国博覧会の記憶と文学

宮澤 文雄

コロンブスの新大陸発見 400 年を記念して 1893 年に開催されたシカゴ万国博覧会には約 2,700 万人が来場した

といわれている。そのなかには、当時の文壇を牽引するウィリアム・ディーン・ハウエルズやヘンリー・アダムズらだけでなく、まだ小説家になる前の新聞記者セオドア・ドライサーの姿もあった。その後、同万博を訪れた作家の多くが、万博体験を基に作品を書くことになるが、意外にもこれまでの文学研究はその点を見逃してきた。そこで本報告は、シカゴ万博を体験した世紀転換期のアメリカ作家の作品を取り上げ、同万博がどのように記憶されたのかを捉えながら、シカゴ万博の文学的受容を検討する。加えて、万博の記憶は、20・21世紀の作家たちにその後どのように受け継がれたのかも取り上げる。シカゴ万博の文学的受容を辿ることで、世紀転換期のアメリカ的想像力を探ってみたい。

第二次世界大戦の記憶と終末をめぐる想像力

小林 亜希

The Day of the Triffids (1951)、*Lord of the Flies* (1954)、*On the Beach* (1957) 等、1950年代に活躍した作家たちが描いた終末小説 (Apocalyptic fiction)の多くは、冷戦期における核戦争の脅威を描いたある種のSF小説として読まれたが、そのリアリティの欠如ゆえに「心地よい破滅」(cosy catastrophe)と呼ばれ、批判されることもあった。しかしながら、これらの作家たちの諸テクストには、第二次世界大戦における記憶の残滓を読み取ることができるように思われる。本報告では、ロンドン大空襲 (the Blitz) から冷戦期までを含むイギリスを寓話的に描いた William Golding の終末小説 *Darkness Visible* (1979)を取り上げ、第二次世界大戦から冷戦期までの記憶がどのように表象され、終末をめぐる想像力を生み出しているか分析したい。

21世紀イギリス小説での移民の記憶の継承

三村 尚央

「記憶の継承」は重要だ。だがその時継承されているという「記憶」とは実際にはいったい何なのか。本報告ではその点を考察するきっかけとして、アンドレア・レヴィの『スモール・アイランド』(Andrea Levy, *Small Island*, 2004) など非白人系イギリス作家の作品での移民体験の表象に着目する。1948年のエンパイア・ウィンドラッシュ号のイングランド東部への到着は、公的な面ではイギリスの多文化の象徴として2012年のロンドンオリンピック開会式で再現されたと同時に、1950年代以降に激化した市民レベルでの人種差別の始まりとしても認識されている。こうした相反する態度を同居させ続ける中で、移民第一世代の経験をめぐる物語は、21世紀に入ってから『スモール・アイランド』など小説の題材になるだけでなく、そのテレビドラマ(2009年)や、舞台作品(2019年)としても再生産されている。本報告では小説作品に描かれる移民たちの世代間での記憶の継承というモチーフとともに、これらの物語の再生産を通じてイギリス国内で継承される移民経験の記憶についても考えてみたい。

談話依存の形態論・語形成：
談話情報はどのように語彙レベルの現象に関与するのか？

司会・講師	新潟食料農業大学講師	西 牧 和 也
講師	筑波大学助教	納 谷 亮 平
講師	広島修道大学助教	石 田 崇
講師	長岡技術科学大学講師	五十嵐 啓 太
講師	岩手県立大学盛岡短期大学部講師	Patrick Maher

形態論・語形成の研究では、文法体系内における形態的規則といった側面が盛んに論じられており、その研究成果は、例えば Lieber (ed.) (2020) *The Oxford Encyclopedia of Morphology* としてまとめられているように、非常に体系的・包括的なものである。こうした研究の方向性に比べ、形態的規則を言語使用の側面と絡めながら分析した研究はそれほど盛んには行われてこなかったように思われる。確かに、Downing (1977) や Dressler and Barbaresi (1997) のような語用論的側面を視野に入れた形態論・語形成の研究も見受けられるのだが、個々の談話を観察し、そこに見られる話し手・書き手の意図や伝達されている情報の性質、修辭的效果といった側面を前面に押し出し、言語使用の場で形態的・語彙的現象を分析する研究は、体系的な形で展開されていないように思われる。しかしながら、こうした方向性での研究は、形態規則・語彙情報が潜在的にどういったコミュニケーション上の可能性を言語使用者に与えてくれるのか、ということをはっきりと示し、翻って、例えば、規則体系に注目した従来の研究で議論の余地が残されていた現象にも言語使用の側面から一定の答えを示してくれる可能性がある。本シンポジウムの目的は、語彙レベルの現象を言語使用の場で観察・分析することで、ここで示した可能性を探ることにある。

並列複合語としての等位接続句：談話情報から見た認可条件

西牧 和也

「男女」のように、等位構造を持つ複合語は並列複合語 (dvandva) として知られている。並列複合語には、類型論的な相違があり、アジア系の言語では生産的であるが、ヨーロッパ系の言語にはほとんど見られないという。例えば、「男女」という並列複合語は、英語では、*males and females* のように、句表現としなければならない (* *male-female*)。しかし、Nishimaki (to appear) は、英語の等位接続句には、並列複合語に特有の解釈が観察される場合があることから、英語では、等位接続句が並列複合語としてのステイタスを持つと分析している。ただ、この分析では、どのような場合に、等位接続句が並列複合語としての解釈とステイタスを持ち得るのかという問題は論じられていない。本発表では、談話情報の観点から、この問題を考察し、その認可条件を明らかにしたい。例えば、Wälchli (2005) は、互いに密接な関連を持つ構成要素が等位接続されることで、並列複合語が形

成されると観察している。Wälchli は、このような等位接続を *natural coordination* と呼んでいる。Nishimaki は、この観察に基づき、等位接続句も、*natural coordination* に関与することで、並列複合語に特有の解釈が生じると分析している。しかし、*natural coordination* であっても、当該の解釈が成立しない場合もあり、その解釈に文脈がかかわることが先行研究において示唆されている (小早川 (2016) を参照)。問題は、その具体的文脈であり、なぜ特定の文脈で、等位接続句は並列複合語としての解釈が可能になるのかということである。談話情報の観点から、このような問題を検討する。

使用場面から見えてくる同格複合語の非等位性

納谷 亮平・石田 崇

同格複合語は、ある個人や個体が持つ異なる性質を表す構成素から成る。例えば、*writer-director* は脚本家かつ監督である個人のことを表す。このことから、同格複合語の構成素は等位の関係にあり、原理的に交代可能であるとされる (例: *writer-director; director-writer*) (Olsen (2001))。同格複合語は、等位複合語の一種とされることが多いが、限定複合語として扱われることもあり、その位置づけをめぐる議論がある (Bauer (2017: 86-87))。このような先行研究の議論においては、実際の使用場面についてはあまり考慮されて来なかった。そこで本発表では、具体的な使用場面で同格複合語を観察することによって、その性質がより整理されたかたちで見えてくることを示す。まず、同格複合語は実際にはいくつかのタイプに分けられることを明らかにする。その上で、それぞれのタイプごとに、構成素の位置関係が話者の使用意図に合わせて決まることを、情報構造といった談話との関係に着目しながら論じる (cf. Lohmann (2014), Naya and Ishida (2020))。このように使用場面から見ると、同格複合語の構成素間の関係は実際には非等位なものであるということが分かってくる。一方で従来の研究では、同格複合語の「等位性」が注目されてきたが、それが実際にはどのようなことを意味するのかについて、本発表の議論から新たな示唆を提示したい。

キャラクター性を生み出す語彙的・形態的手段の記述的研究

—英語絵本を事例として—

五十嵐 啓太・Patrick Maher

金水 (2003) 以来、日本語における役割語の研究が盛んに行われており、文末表現や人称表現などを駆使した様々な役割語の存在が明らかになってきた。一方で、英語に目を向けると、登場人物の役割を表現するのに、日本語と同じような語彙的手段に頼りづらいことが指摘されている (山口 (2007))。しかし、山口 (2007: 9) が述べるように、「相当なハンディを背負いながらも」、英語でも役割語が生み出される。これは、「役割語がステレオタイプの人物造型に長けており、読者に対し円滑で手のかからない伝達を可能にするから」(山口 (2007: 9)) とされている。

このように便利な役割語は、英語の絵本という環境で重宝されることがある。絵本の場合、ページ数が限られ

ているため、登場人物よりも話の筋に重きが置かれる傾向にあり、大抵の登場人物は、変化や成長のない表面的な存在になる (Nikolajeva and Scott (2001))。しかし、当然絵本の登場人物にも個性があるため、限られた紙面の中でもそうした個性を表現しようという絵本作家の創意工夫が見られるはずである。その一つの手段として、ある種の語彙・語形を用いた手段が観察される。本発表では、英語の絵本の中で、語彙的・形態的手段がどのように活用されながら「円滑で手のかからない」キャラクター性の付与が行われているのかを記述・分析することで、談話内における語彙・語形の創造的使用の一端を明らかにする。